

美術随想 (6)

鴨の来訪と一つの逸話

大和文華館館長 石澤 正男

東京芸術大学・蓬莱鏡(左)
東大寺・執金剛神像(中)
同 模 造(右)



つぎつぎに咲きだす春の花に一日一日を追われるような気持ちで過ごしている間に、早いもので今日は立夏を迎えました。いまはひらどつつじが花盛りですが、ここの松山全体に自生しているもちつつじも一足おくれで咲き始めています。もちつつじは花期が長く5月末まで咲きつづいて6月に咲くさきゆりに花のバトンをおわたすこととなります。立夏ともなればいつのまにか冬鳥が姿を消しているのに気がつきます。冬鳥といえば読者の皆さんにお知らせしておきたい嬉しい便りがあります。それは大和文華館の敷地を半分ほどとりまわっている蛙股池に、この冬始めて野生の鴨の群が訪れてきて冬を過ごしていったことです。この池にはいつもかいつぶり(別名、鳩)の一家がいて、愛嬌のあるもぐりの妙技と長く尾をひく奇声で吾々を楽しませてくれていますが、ほかの水鳥はついで見かけたことがありませんでした。ところが1月9日、いつものように池の水面を眺めると見馴れぬ水鳥が悠々と遊んでいるではありませんか。私は心の躍る思いをおさえきれませんでした。数えてみたらその日の鴨は全部で9羽に過ぎませんでした。その後鴨の群はだんだん大きくなり数日後には30余羽になりました。初めはまがもかと思っていましたが、双眼鏡で観察したらはしびろがもであることを確認しました。最初発見した当座は羽色の鮮やかな雄はごく僅かでしたが、去年の若鳥の雄がここにいる間に換羽を終え3月中旬には堂々たる雄鴨の姿となりました。その結果この群全体が雌雄半々ぐらゐの美事なものとなり、毎日眺めて楽しんでいましたが、4月上旬のある日突然どこかへ消えてしまいました。恐らく遠い北国に営巣の地を求めて飛び去ったのでしょう。池はもとのようにかいつぶりだけとなって急に淋しくなりました。今はただこの鴨の群が次の冬に再びここへ戻って来てくれることを願っています。もしも今年殖える若鳥を加えてもっと大きな群となって来てくれたならばどんなにか素晴らしいだろうなどと、松山で鳴く春蟬ののどかな声を聞きながら空想しています。

今日は鴨の来たお知らせで紙面を大分さきましたので、人の知らないこぼれ話を一つ皆さんにお伝えしておくことにします。それは図示の蓬莱鏡にまつわる話であります。この鏡は東京芸術大学の所蔵品ですが、元は東大寺法華堂の有名な秘仏・塑造の執金剛神立像(国宝)が納められている厨子の扉に紐で懸けられてあったものでした。蓬莱鏡というのは蓬莱山、即ち中国の伝説で東海中に屹立する理想境を象徴化した文様のある鏡の総称で、日本では平安時代から盛んに作られました。普通

の蓬莱鏡はこの鏡ほど図様は複雑でなく、もっと簡略化されております。この鏡には仙人の前に浄瓶をおき、その傍に鶴が翼を拡げて仙人からなにかもらう様子をしており、左の小さい岩山の上には亀がしがみついています。空中には鶴に乗った仙童が蓬莱山に接近しています。最も変っているのは3本足の卓に豊麗な花を活けた大花瓶が据えられている点であります。数ある蓬莱鏡の中でも誠に異色のものですが、制作も優秀で、径19.7厘もある立派な鏡です。制作時代は南北朝か室町初期と推定されます。この鏡の箱には竹内久一が明治15年に入手したことを明治28年に書いております。それまでは恐らく箱はなかったのでしょう。

竹内久一(1857~1916)、号久遠は高村光雲(1852~1934)と共に明治を代表する木彫作家であります。光雲同様生粋の江戸児でした。彼は13才の時から象牙彫刻を学び牙彫師として世に立ちましたが、明治15年奈良に旅行し古代の優れた仏教彫刻を数多く見て大いに感激し、それが転機となって木彫作家となったと伝えられています。非常によく刀の切れる人で東京美術学校が創立される際に光雲よりも先に教師に採用されています。美術学校の初代校長岡倉覚三(1862~1913)、号天心は同時に帝国博物館(東京国立博物館の前々身)美術部長を兼ねていました。明治23年に天心の発想で博物館のために日本美術の貴重な古典となる絵画、彫刻の模写・摸刻制作案を樹立し、その実施は美校に委嘱する方法をとりました。これは正に色々な観点からみて画期的な事業でありました。当時すでに木彫の教官であった久遠は東大寺、興福寺の重要作品数点の摸刻を担当しましたが、法華堂の秘仏執金剛神はその一つでした。久遠がこの名作の摸刻をすることになったと聞いて胸のおさまらなかつたのは加納鐵哉(前号美術随想参照)であります。鐵哉は自分も欲しくてたまらなかつたこの蓬莱鏡を久遠に先をこされてしまったので、この機逸すべからずと「うつすなら鏡を返せ蓮池坊」の一句を作り久遠をからかったのです。蓮池坊とは久遠の俳号です。然し鏡は結局お寺へは戻らず明治38年小菅某から美校へ納められました。

(49・5・6記)

季刊 美のたより No.28

昭和49年6月1日

発行 大和文華館